2年目のラーネッド記念図書館ラーニング･コモンズの活動報告
―理系学生による学習相談を中心に―

学習支援・教育開発センター　准教授　**澤宏司**

要約

本稿では、同志社大学ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズの開設２年目の様子を報告する。同施設の特徴の筆頭は利用学生、スタッフの大学院生の両者の多くがいわゆる理系の学生であることである。本学に十分に蓄積がある文系学生・院生によるラーニング・コモンズの利用状況と比較しながら、理系に特有な事情、性質、およびその理想的な方向性を、実例をもとに検討する。

１．概要

2018年４月、「ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズ」は今出川校地にある「良心館ラーニング・コモンズ」に続く本学２か所目のラーニング・コモンズ（以下、LC）として京田辺校地に開設された。理系学部が多い京田辺校地においては、その利用のされ方は文系学部が主の今出川校地にある良心館LCとは異なることが予想されていた。ラーネッド記念図書館LCの１年目の様子は木原･浜島（2019）に詳しいが、ラーネッド記念図書館LCの大きな機能の１つである学習相談に関して簡単に言えば、「理系科目に関する具体的な相談が多かった」となる。

具体的には以下の通りとなる。2018年４月～12月の学習相談総数557件に対し、395件（約71%）が「特定の科目の学び方」となった（木原・浜島 2019）。これは同年度の良心館LCの学習相談の上位３項目「レポートの書き方」、「調査、研究の方法」、「論文の書き方」の合計で約65%となるのと異なる性質である。文系キャンパスでは論文･レポートの書き方などのアカデミック・スキルズが、理系キャンパスでは科目に特化した具体的な相談が求められたといえる。

ラーネッド記念図書館LCの２年目にあたる2019年度の学習相談も総数700件のうち463件（約66%）が「特定の科目の学び方」と、同様の傾向となった。なお、2019年４月に着任した筆者の専門領域は数理科学・数理論理学であり、着任時において、両LCの運営を担う学習支援・教育開発センターで唯一、かつ同センター初の自然科学系の教員である。

ラーネッド記念図書館LCは同図書館の１階にあり、その敷地面積は626平方メートルである。その詳細は同様に木原・浜島（2019）を参照されたい。ここではその特性を「ひと目で見渡しの利くワンフロア」と表現する。ノートPC、モニタ、プロジェクタ、ホワイトボードなどが自由に使えるのは良心館LCや他大学のLCと同様である。

ラーネッド記念図書館LCが担う機能は、１）学生が自由に利用する自習施設、２）学習に関するイベント開催、そして３）常駐する教員（筆者）、アカデミック・インストラクター各１名と本学大学院生「ラーニング・アシスタント」（以下、LA）による学習相談、この３つが主である。

自習で利用する学生は、１人で、数人で、大人数で、の３形態での利用がみられる。自習の施設として同棟２階にあるラーネッド記念図書館と比較をすれば、１）図書館派とLC派に好みが分かれる、２）１人のときは図書館、数人～大人数のときはLC、と使い分ける傾向にあることをLCの利用学生から聞いたことがある。静粛が求められる図書館と、闊達なやり取りが推奨されるLCのそれぞれの特性と合致している。

2019年度のラーネッド記念図書館LCは、同時に勤務する人数（カッコ内は総数）で、所長１名、教員１名（１名）、アカデミック・インストラクター１名（１名）、LA １～３名（16名）に加えて、本学学生・大学院生による機器利用サポートスタッフ（通称「紺ジャン」）１～２名（７名）、受付スタッフ１名（６名）と学習支援・教育開発センターの職員（５名）で運営された。

２．学習相談

本節ではラーネッド記念図書館LCの主要な機能の１つである学習相談について述べる。学習相談に対応するのは教員、アカデミック・インストラクターとLAである。１件の相談に対し、教員、アカデミック・インストラクターおよびLAが複数名で対応することもある。2019年度のラーネッド記念図書館LCの学習相談対応ののべ回数は教員、アカデミック・インストラクター182回、LA658回であり、実際の対応はLAが担う分が大きい。

２-１．方針

本学の両LCにおける学習相談はあくまでも学習の「支援」であり、安易に答えを教えることが目的ではない。このことは本学LCおよび学習支援･教育開発センターのウェブサイトにおいて「支援」、「サポート」といった語が頻出することからもわかる（同志社大学 2018a, 2018b）。先述の通り、アカデミック・スキルズよりも科目に特化した具体的な質問が多いラーネッド記念図書館LCにおいても、同様の方針に基づき、実際の相談業務が行われる。

具体的な内容の質問に対して、対応の多くを担うLAがどのように対応するか。これが、理系学部が多い京田辺校地のラーネッド記念図書館LCにおける学習相談のもっとも肝要なところである。

２-２．実例

このような状況下にある学習相談の状況をみるべく、2019年度の学習相談の記録をいくつか紹介する。ラーネッド記念図書館LCでは全相談を記録しており、以下はそこからの抜粋である。対応したLAのコメントをそのまま引用し、傍点による強調は筆者による。

▼例１：理系基礎科目

相談学生：生命医科学部１年
内容：線形代数の計算について
対応LA：生命医科学研究科前期課程２年
対応：ランクの求め方や式変形の公式について一緒に復習しました。説明だけでは腑に落ちていないようだったので、流れだけ確認して残りは解いてみてまたわからなければ来てくださいとお伝えしました。

▼例２：留学生による相談

相談学生：グローバル・コミュニケーション学部１年（外国人留学生）
内容：日本語の本の内容理解
対応LA：心理学研究科後期課程２年　生命医科学研究科後期課程２年
対応：一緒に本を読んで、図を用いて内容を体系的に理解できるように努めた。

▼例３：理系専門科目

相談学生：生命医科学部４年
内容：卒論のテーマでR形状が力が減少する構造について
対応LA：理工学研究科後期課程２年
対応：材力でR形状の計算はしたことがないのですが、機械工学上R形状は、応力が分布するという事例があるので、その考え方をおすすめしました。

▼例４：大学院進学

相談学生：生命医科学部２年
内容：他大学の大学院進学について
対応LA：理工学研究科前期課程２年
対応：体験談を話しながら、必要になりそうなことをお伝えしました。

３．LA

本節では、ラーネッド記念図書館LCにおけるLAについて述べる。

３-１．概要と求められる資質

2019年度は前期課程10名、後期課程６名の計16名のLAでスタートした。研究科別の人数は、文化情報学研究科２名（前期１、後期１）、理工学研究科７名（前期５、後期２）、生命医科学研究科５名（前期４、後期１）、心理学研究科１名（後期１）、スポーツ健康科学研究科１名（後期１）である。本学の規定（以下、「申合せ」）（同志社大学学習支援・教育開発センター 2019）第３条の２「LAは、（中略）、リサーチ・アシスタントを兼ねることができない」を理由に年度途中で２名が退任し、最終的には14名が１年の任用期間を満了した。なお2019年４月時点でラーネッド記念図書館LC開設時に採用し２年目を迎えたLAが14名、新採用２名、また、日本人学生が14名、外国人留学生が２名であった。

LAには基礎科目やそれぞれの専門科目、語学などへの習熟、また、研究を進める・伝達する能力など様々な力が求められるが、望ましい資質はそれだけではない。「申合せ」第５条にあるようにLAの任務は種々の学習活動の「支援」であり、通常の授

業のような知識の伝達・提供とは性質を異にする。１回30分程度の短時間が推奨される学習相談において、円滑な「支援」を実現するためには状況把握、観察、助言など、より通常のコミュニケーションに近い能力も必要である。後述するLAの研修においても、これらの能力は、むしろこれらの能力のほうが重要視される傾向もある。

３-２．育成

LAの育成は年に数回の研修と、月１回の頻度で行われる「LA全体会議」がその公的な機会となる。

2019年度のラーネッド記念図書館LCのLAの研修は2019年３月と11～12月の計２回が行われた。当日の欠席者は別日に改めて行われ、結果として各回とも全てのLAが参加した。

３月の研修は、LA業務や学習相談に関する座学、学習相談のロールプレイ、「プロジェクト」という名称・単位で行われる日々の業務に関する検討などであった。11～12月の研修も同様であるがそちらは「フォローアップ研修」と称し、日々の相談業務の実態に近いものを企図し、ロールプレイはより白熱したものとなった。

日々の学習相談の状況やLAの試行および達成を紹介するべく、ここでは11～12月のフォローアップ研修時のLAの発言をいくつか紹介する。教員側が事前に課した課題は「2019年度にご自身が受けた相談において、よかった事例（よい相談になった、よい対応ができた）と、悪かった事例の報告」である。以下はすべて各LAが「よかった事例」として報告した事例である。LAの口頭報告を筆者がまとめた。傍点による強調は筆者による。

▼事例１（報告LA：理工学研究科前期２年）

理工学部・情報工学科の学生による「論理回路演算」に関する相談。具体的な問題を持参した相談学生に対し、メモをあげるのは好ましくないと感じ、連続する３問の設問のうち設問１だけ一緒に確認、設問２は相談学生がその場で解き、残った設問３は相談学生が「もうできる」と言って解かずに帰った。

▼事例2（報告LA：生命医科学研究科前期２年）

生命医科学部２年生によるプログラム言語「スクラッチ」に関する相談。一緒

に調べ、結局わからなかったが、相談学生は満足して帰った。たくさん調べ、逐一確認したことが相談学生の満足につながった。一般的に学生は検索能力が低く、見つけられた体験が重要である。

▼事例３（報告LA：理工学研究科前期２年）

プログラム言語「Ruby」に関する相談。一緒に調べながら対応。自分も知らなかったのがよかった。利用学生の自発性、自律につながった。

すべてのLAの報告を聞いた感想として、LA自身が十分に知っていて得意なことよりも、そうでないことに関する相談のほうが利用学生、LAの両者の満足度が高いように感じたことを特筆したい。これが正しいとすれば、ここに授業とは異なる「支援」の本質があるように感じている。まったく知らないことの相談は実際としても心理的にもLAにとって厳しい負担となるが、よく知っていることから少しだけ外れたことに対応することが、利用学生と対応するLAの育成につながる可能性があると考えている。

３-３．その他の活動

学習相談の他にも「学習環境の維持」がLAの任務として明示されている（「申合せ」第５条（４））。先述の通り、ラーネッド記念図書館LCのLAは前述の「プロジェクト」に分かれ、就業時間中にその任務にあたっている。2019年度のプロジェクトは「ツール」、「サイネージ」、「アンケート」、「広報」、「労働組合」であった。「サイネージ」班による「LCクイズ」、「労働組合」班による「学生証読み取りデバイスの作成」などがその成果の一例である。成果物の多くは実際に稼働しており、ラーネッド記念図書館LCの円滑な運営に不可欠なものとなっている。

各学期当初以外は、LAは曜日・時間を固定して勤務するため、全体会議以外では直接会わないLAも多い。同プロジェクトのLAメンバー間においても同様である。LA同士、あるいは教員、アカデミック･インストラクターとのやりとりは、学内のコミュニケーション基盤の１つ「ポートフォリオ」を通じて行われる。

本節の最後に、あるLAの発言を紹介する。理工学研究科前期２年のLAは2019年度最後のLA全体会議で「周りのLAさんの強みや専門性をよく知ることで相談者さんのためにも自分のためにもなる」（「第７回LA全体会議議事録」より）と発言した。具

体的な相談、業務に関するコミュニケーションはもちろん、必ずしもその範疇に収まらないLA同士のコミュニケーションはLC全体へ寄与、醸成につながると筆者は考えている。

４．課題

2020年度に３年目を迎えるラーネッド記念図書館LCの課題として、以下のいくつかの検討が必要である。

１つはLCの利用者数と学習相談の利用者数の関係である。定期試験の時期には満席となり、利用を諦める学生が頻繁にみられるが、その時期でも学習相談が同様の状態になることは少ない。今出川校地の良心館LCと異なり、ラーネッド記念図書館LCは入室時の学生IDの提示が不要なため、学部別や学年別を含めLCの利用実態の詳細はつかめていない。IDを必要としないことは、利用に際しての心理的負担を軽減していると思われるため、筆者はID提示に相当するゲートなどの導入は不要と考えている。ではあるが、LCの利用者数と学習相談の利用者数の関係を探るためには、前者の情報が必要である。プロジェクト「ツール」班に属するLAが構想、試作し、実際に仮運用を開始している「入退室カウントデバイス」は、この調査に活用できる可能性が高い。なお、このシステムは赤外線センサーで入退室の動きを感知するため、物理的なゲートを必要としない。ひとりですべてを担当したLAは生命医科学研究科前期２年であり、所属研究室での自身の研究成果を活用した好例となった。

２つめの課題として両LCのLAの交流を検討したい。両LCのLAの交流は双方のLC、LAのいずれにも貢献すると考えている。良心館LCのLAは文系が、ラーネッド記念図書館LCのLAは理系が主であり、その運営や寄与のスタイルにそれぞれ独自のものがある。2019年11月、筆者らが支援し、良心館LCで実施した数理的思考の導入イベント「マスカフェ」では、両LCの交流の兆しが見られた。地理的に距離があるため、LAの個人的負担を伴わない交流は難しい状況であるが、この実現は予算措置するに値する価値があると考えている。関連して、「申合せ」第２条には「LAが教育経験を積む機会を提供することによって、教員、研究者、専門職業人としての自立を奨励する」とある。これは、両LCの教員、アカデミック・インストラクターが進めているLAの研修プログラムの統一化などの延長上にあり、より体系的な展開の行く末には、巷間で「プレFD」と言われる大学院生支援があると考えている。

付記

本稿に記載した記録、コメント等は学習支援・教育開発センターの業務上得たものである。

謝辞

同志社大学学習支援･教育開発センター所長の廣安知之先生、同センター所属でラーネッド記念図書館LCで同僚の趙智英先生に感謝申し上げます。同LCで一緒に仕事をしたすべてのLAの皆様に感謝申し上げます。同センターの事務職員の皆様、同教員の先生方、同LCの機器利用サポートスタッフ、受付スタッフの皆様にもこの場を借りて厚く御礼を申し上げます。

文献

同志社大学，2018a,「京田辺 アカデミックサポートエリア」(2020年３月31日取得，https://ryoshinkan-lc.doshisha.ac.jp/usage/academic_support_area_k.html)

同志社大学 2018b,「2018年度　学習支援検討部会活動報告」(2020年３月31日取得，https://clf.doshisha.ac.jp/section/support.html)

同志社大学学習支援･教育開発センター，2019,「同志社大学学習支援･教育開発センターラーニング･アシスタントに関する申合せ」『同志社大学学習支援･教育開発センター年報』10: 147.

木原宏子･浜島幸司，2019,「同志社大学ラーネッド記念図書館ラーニング･コモンズにおける学習支援の実践と課題：理系学生の多いキャンパスでのラーニング･コモンズ開設初期の取組」『同志社大学学習支援･教育開発センター年報』10: 30-40.